

あるとき、お百姓が、年とった犬を屋敷から追い出しました。

犬は、若いときは番犬として、どろぼうやおおかみを追いはらって、りっぱに働きました。けれども、年をとって役に立たなくなると、お百姓は、犬をきんさんぐりつけていいました。

「このなまけものめ。食べては寝るだけで、ほえもしないし、てんで役に立たん」

お百姓は、犬に食べ物も与えないで、とうとう追い出してしまったのです。

犬は、屋敷を出て、泣きながら、あてもなく歩いて行きました。すると、おおかみに会いました。おおかみは、

「ふふ。おまえはもうおれのものだ。おまえは、情け知らずで、いつも百姓の屋敷から追いはらってくれたな。さあ、おまえを食ってやるぞ」といいました。犬は、

「おれは何もかもどうでもいいんだ。食ってくればありがたいよ」といいました。おおかみは、なんだかかわいそうになって、

「それはまた、どうしてだ」と聞きました。

「おれも若いうちは、主人のために、ならず者たちを追いはらったものさ。主人の役に立っていたんだ。年をとって少しはいいこともあるかと思っただ、反対に悪いことになっってしまったてね」

「どうしてだ」

「どうもこうもない。主人は、おれをぶんぐって、食べ物もくれない。おまけに棒でなぐって屋敷から追い出したんだ。いっそ、だれかが食ってくれればいい。長いこと苦しむより死んだほうがましだ」

おおかみは、心を揺さぶられて、いいました。

「いい方法を教えてやろう。家にもどって、明日、主人夫婦が草刈りに行くとき、おまえもついて行くんだ」

「どうして、おれがついて行くんだ。なぐられるじゃないか」

「なぐられたつてついて行くんだ。夫婦は、いつものように赤ん坊を連れていくだろう。おまえはゆりかごのそばを離れるな。夫婦が、草刈りを始めたら、おれはこっそりゆりかごに近寄って、赤ん坊をくわえて逃げるから。おまえはおれを追いかけて来て、おれ

と戦うふりをするんだ。おれは、すぐに赤ん坊を放して逃げる。夫婦は走って来て大喜びするだろう。おまえはまた、もとのような生活にもどれるよ」

犬は喜んで、走って家に帰りました。

朝になると、お百姓夫婦は、畑に草刈りに出かけました。犬がついて行きました。お百姓は、

「おまえ、舞い戻って来たのか。この役立たずが」といい、おかみさんは、

「近所をうろつかないように、ぶち殺してやりましょう」といって、ふたりで犬をさんざんぶちました。それでも、犬はついて行きました。

夫婦は、畑まで来ると、赤ん坊をゆりかごに入れてわら束たばのそばに置き、むこうへ行つて草刈りを始めました。犬はそつとゆりかごのそばに横になりました。

そのとき、待ちかまえていたおかみが飛び出して、さつと赤ん坊をくわえて逃げました。お百姓の夫婦は、遠くからそれを見つけて、大声でさけびました。

「おかみだ！ おおかみに子どもがさらわれた！」

犬は飛び起きておかみを追いかけました。おかみは犬が追いつきそうになると、ゆっくり走りしました。そこで、犬はおおかみにかみつくふりをしました。おおかみは赤ん坊を放して逃げて行きました。

お百姓の夫婦は、急いでかけつけて、赤ん坊を抱きあげて大喜びしました。

「ねえ、この犬がいなかったら、うちの子はおおかみに食べられていたところよ」

「そのとおりだ！」

「犬を死ぬまでうちに置いてやりましょうよ。何でも食べたいだけ食べさせてやるわ」

犬はまた幸せになりました。

あるとき、おおかみが犬を訪ねてきました。

「やあ、どうだい。うまくいってるかい」と、おかみが聞きました。犬は、

「おかげでうまくいってるよ。おれが何をして、だれもなぐらない。ステーキでも何でも食べたいだけ食べさせてもらえるんだ。おまえに神さまのおめぐみがあるように。

おまえは知恵をつけてくれたうえに、骨身ほねみを惜しまず手伝ってくれたからなあ」といいました。すると、おおかみがいいました。

「だったら、子ひつじをいっぴきもらえないかなあ。おれはお腹が空いてぶっ倒れそうなんだ」

「いや、子ひつじはやれないよ。でも、明日、うちへおいでよ。主人がお祭りの後、宴会をするんだ。そのとき、何でもおまえの欲しいものを食べさせてやるよ。ステーキは生肉よりおいしいよ」

次の日、お祭りの後、主人やお客たちは、テーブルについて食べたり飲んだりしはじめました。そこへ、裏口から、おおかみがやって来ました。犬は、こっそりおおかみを部屋に入れて、人びとの間をくぐりぬけてベンチの下に隠しました。

「ここで待っていてくれ」と、犬はいました。そして、あちこち走り回って、テーブルに伸び上がり、ステーキをくわえて取りました。お客たちは、

「やめろ！ おい、犬がステーキを取ったぞ」とさげびました。お百姓は、

「いいんですよ。ほっておいてください。欲しがるものは何でもやることにしているんです。うちの子の命を救ってくれたんですから」といいました。

犬は、ベンチの下のおおかみに、ステーキをやりました。おおかみは、それを食べて、「おまえのいったとおりで。ステーキは生肉と違って、すばらしくおいしいよ」といいました。

「そうだろう。どんどん食べてくれ」といって、犬は、こんどは白パンをくわえて来ておおかみにやりました。

おおかみは、ごちそうをお腹いっぱい食べて、いい気持ちになって、ベンチの下にすわっていました。

お客たちもごちそうに満足して、いい気持ちになって歌を歌いはじめました。おおかみは、それを聞いて、

「どうして、あんなに歌うんだ」と尋ねました。

「あれは、飲んだからだよ」

「何を飲んだんだ」

「ブランデーさ」

「ふうん。どんな味が試してみたいなあ」

「よし来た！」

犬は、テーブルに伸び上がり、ブランデーのびんの首を前足の間にはさんで取りました。

「やめろ！ 犬がブランデーのびんを取ったぞ！」と、お客がさげびました。

「いいんですよ。ほっておいてください。欲しがるものは何でもやることにしているんです。うちの子の命を救ってくれたんですから」

犬は、ブランデーをおおかみにやりました。おおかみは、ブランデーを飲んで酔っぱらい、頭がくらくらしてきました。そして、いいました。

「おれは歌うぞ」

「だめだ。歌ったりするとなぐられるぞ」と、犬はいいました。

「じゃあ、どうして人間どもは歌うんだ」

「それは話が別だ。おまえはぶんなぐられる」

「いや、それでも歌いたい」

「頼むから歌わないでくれ。外へ連れ出してやるから、森へ行つて歌うんだ」

「森で歌うなんて、間がぬけてる。おれは、ここで歌いたい」

おおかみは、ベンチの下で歌いはじめました。

うううう　うううう

お客たちはぎよつとしました。

「なんだ？おおかみじゃないか」

おおかみは歌いながら気持ちよくベンチの下から出て来ました。主人もお客たちもびつくりして、めん棒やこん棒を持って、おおかみになぐりかかり、しっぽをつかんで引つ張りしました。おおかみは、やつのことで部屋から飛び出して、逃げて行きました。けれども、しっぽがちよん切れてしまいました。

犬は、おおかみを追いかけるふりをして、走り出しました。そして、森まで来て追いつくと、

「だから、歌うなつていったのに」といいました。おおかみは、

「おまえも、主人も、あの飲み物といっしょに悪魔にさらわれるがいいや。どんなに頼まれたつて、もう二度とごちそうを食べになんか行つてやらないからな」といいましたとさ。

おしまい

村上郁再話